かるがも

第 17 号

発行所　千葉県こども病院
〒266-0007　千葉市緑区辺田町 579-1
TEL 043-292-2111
FAX 043-292-3815
http://www.kodomo.umin.jp/

新年のご挨拶　◇ ◇ 年頭に当たって◇ ◇

病院長　伊達裕昭

皆様には暮れから新年をいかがお迎えになられたでしょうか。昨年末からノロウィルスなどによる感染性胃腸炎や RS ウィルスによる気管支肺炎、A 群溶連菌の咽頭炎などが流行し、体調を崩される方が多かったようです。これからはインフルエンザの流行も懸念されます。マスクの着用、外出後の手洗いとうがい、適度な温度と湿度（インフルエンザウイルスは低温低湿度を好む）、栄養と休養を充分にとる、人混みを避けるなど日常生活での体調管理には一層ご注意下さい。

さて流行といえば、昨年の流行語大賞を覚えていらっしゃいますか。一つはトリノオリンピックのフィギュアスケートから荒川選手の「イナバウアー」、もう一つは数学者の藤原正彦教授の著書「国家の品格」から「品格」でした。どちらも多くの人が眼や耳にした言葉で、なるほどという結果です。しかし医療の現場としては、昨年は「医療崩壊」という言葉が大賞に選ばれても不思議ではない一年だったと考えています。これは虎の門病院の小松秀樹医師が著した本の題名ですが、新聞や雑誌、TV の見出しなどでも眼にされたことがあると思います。それ程、昨年、全国の病院で起きた産科や小児科を始めとする診療機能の縮小や停止の連鎖は大きいものでした。しかしこの本が語る『現在、日本の医療機関は医療費抑制と安全要求という二つの強い圧力にさらされている。この相矛盾する圧力のために労働環境が急速に悪化し、勤務医が病院から離れ始めた。現状は外部が想像するよりもはるかに危機的である』という内容は、残念ながら「イナバウアー」や「品格」程は一般の方の興味を引かなかったようです。

現在、日本の国民総医療費は年間に約 32 兆円に上ります（平成 17 年度）。しかし GDP(国内総生産）に占める割合で比較すると、アメリカが 15.2%と世界で最も医療にお金を費やしているのに対して、日本は 8.0%に留まります(OECD データ 2003)。これは OECD30 カ国の中で 18 番目の低い数字

ですが、我が国は高齢化に伴い増加する医療費の伸びを抑制する政策をとり続けています。この状況下では医療現場に人手を増やしたり、最新の医療機器を備えることが難しくなります。一方で医療が進歩して複雑、高度になり、リスクを生じる過程が増したにも係わらず、医療に限界は無いと考えているかのように安全と完璧を求める声はさらに高くなっています。この相反する状況の中で、努力してもそれが認められないばかりか時には世間から非難、攻撃されることに疲れ果て、病院から医師が立ち去りつつある、というのが「医療崩壊」が説く構図です。国産大衆車の予算でポルシェの馬力とベンツの安全性を兼ね備えた車を大量生産して欲しいというユーザーの飽くなき要求に、少ない従業員で応えようとして疲弊する工場の職員、とでも言い換えれば俗に過ぎるでしょうか。しかもこれは遠く離れたどこか地方の話ではなく、この千葉県でも起こりつつある日本の医療の現状なのです。

なぜこのような事態が生じたのか。それを解く鍵は医療の提供体制にあるかも知れません。OECD の統計（2002 年）によれば、人口 1,000 人当たりの医師数、看護師数は日本が 2.0 人と 7.8 人、アメリカは 2.3 人と 7.9 人で大差ありません（参考：千葉県は 1.5 人と 6.5 人）。しかし病床 100 床当たりの医師数、看護師数になると、日本が 13.7 人、54 人に対し、アメリカは 66.8 人、233 人と桁違いの人手をかけた医療を提供しています。日本では人口当たりの病床がアメリカの 4～5 倍あるために、人員配置が薄くなって医療従事者の疲弊に繋がると言われます。適度な規模の病院が身近にあり、いつでも安く入院医療を受けられる日本の医療の良い点が、医療者側には欠点として表れているわけです。

医療は国全体で守るべき重要な公共資源です。簡単に答は見つからないかも知れませんが、「医療崩壊」という言葉が、この大切な資源を維持するために何をすべきかを改めて考えるきっかけになることを希望しています。それは医療を提供する側だけの問題ではなく、受ける側にも課せられた重要な問いかけです。共に考えることで初めて私達は医療に関する真のパートナーシップを築くことができるのではないでしょうか。

毎年流行する現象の多くは一過性で、ほどなく忘れ去られます。あと 1 年もすると「イナバウアー」も「品格」も人々の頭から消え去っているかも知れません。その例に漏れず、平成 19 年は「医療崩壊」などという言葉が聞かれなくなるように医療状況が好転することを願い、また皆様の平穏な一年を心からお祈り申し上げ、年頭のご挨拶に代えさせていただきます。

平成 19 年 1 月 1 日